

『グロースターの仕立て屋』

(ピーターラビットの絵本15)

ビアトリクス・ポター／作・絵

いしい ももこ／訳 福音館書店(2019年)

イギリスのグロースターという町に、仕立て屋のおじいさんが住んでいました。ある時、仕立て屋はグロースター市長の婚礼用の衣裳の注文を受けました。上等な布をむだなく使って仕立てていきます。ところが衣裳を仕上げるための、あな糸が足りません。実は仕立て屋の飼い猫が、エサのネズミを逃がされたことの腹いせにあな糸を隠していたのです。市長の婚礼はクリスマスの朝です。衣裳は無事仕上がるのでしょうか。

『ぼくのまつり縫い 手芸男子は好きっていけない』

神戸 遥真／作 井田 千秋／絵

偕成社 (2019年)



なんとなく流れでサッカー部に入部した中学一年生の針宮優人はサッカー部にいることに違和感を覚えます。そんな時、部活中にケガをして休部することになりました。ある日、クラスメイトの糸井莉香に連れられてなぜか被服部の手伝いをする事になります。男の子らしくないと周りに言われるのが嫌で隠してきましたが、本当はピンク色もフリルも手芸も好きな優人が、好きなものを好きと言えるようになるまでのお話です。

『ミトン』

小川 糸／著 平澤 まりこ／画

白泉社(2017年)



マリアの生まれたルップマイゼ共和国は、とても寒さがきびしいのでミトンなしでは生きていけません。そして誰もが自慢のミトンを持っています。マリアも生まれた日におばあさんから真っ赤なミトンを縫ってもらいました。この国では、人が生まれ、恋に結婚に、そして亡くなるまで、言葉で伝える代わりにミトンに思いを込めて贈るのです。波乱に満ちながらも温かい人生を送った彼女のそばには、いつも神様の宿る美しいミトンがありました。

『モリオ』

荻上 直子／著 光文社(2010年)



ある日、引込み思案のモリオが、母の形見に足踏みミシンをもらいます。すると、小さい頃姉が作ってもらった花柄のスカートがはきたかった事を思い出します。そして、黒猫に導かれてたどり着いた「ひだり布地店」でモリオが求めていた、暖かい春の匂いがする様な、心が躍る布と出会いスカート作りを始めます。大人になって、小さい頃の自分が本当にしたかった事に気づき、勇気をもって一歩を踏み出す物語です。



『風を縫う 針と剣縫箔屋事件帖1』

あさの あつこ／著 実業之日本社(2016年)

縫箔屋(ししゅうや)・丸仙の娘、おちえは、針仕事よりも剣術がとくいです。でも周りからは、女に剣術は必要ない、剣士にはなれないと言われるばかり。ある日、丸仙に、ししゅう職人になりたいという武士、一居がおとずれます。せっかく立派な家に生まれたのに、身分を捨ててまで職人になりたがるのはなぜなのか。ふしぎに思いながらも、おちえは一居に心ひかれていきます。その矢先、若い娘をねらった殺人事件が起こります。

『世界のかawaii民族衣装 織り、染め、刺繍、』

レースなど手仕事が生み出す世界の色と形』

上羽 陽子／監修 国立民族博物館／協力

誠文堂新光社(2013年)

民族衣装と聞いて、みなさんがまず思い浮かべるのは、着物でしょうか。他にも、インドのサリーやペルーのポンチョなどが有名ですね。民族衣装は、ただ着るのではなく、各地域で様々な思いを込めて彩られ、民族の伝統を担ってきました。また、美しい生地、細やかな刺繍、華やかな文様が織り成す服飾は、機能だけでなく見た目にもとても芸術的です。刺繍をやっている人はもちろん、ただ写真を見るだけでもとても楽しい一冊です。